

Title	語構成からみた古今集の話彙
Author(s)	神谷, かをる
Citation	語文. 1987, 48, p. 18-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68754
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

語構成からみた古今集の語彙

神 谷 かをる

古今集において、例えば「萩」という語が独立語として用いられているのみならず、「萩原」のように、複合語上項や「萩秋」のように下項に用いられているという例はよく見られる。即ち、一つの語が、複合や派生をして多くの語を形成していることが多いことに気づくのである。そこで、古今集の用語を内部からみてゆく。方法としては造語法を検討し、さらにそれが、万葉集にある造語法か否かを調べてみる。ただし、語構成そのものを論じるのが目的ではないし、造語法は、語源や、その時代の言語の体系的語彙がある程度把握してからでないとい眺めにいく問題であるので、まずは、一つの語や語基がいかにも多用されているかに着目することから始めたい。分類法として、例えば「萩」は、「萩・萩原・秋萩・唐萩・小萩」が集に見られるがそれ全てを「萩」という一語基のグループとする。品詞が変わってもよく、「変る」は、「変りゆく・心変へ」も含めて一語基グループとする。「忘る」などの、四段・下二段は、同一グループにし、「古し・古る・古す」やその複合語・派生語も同一グループにした。ただし、「ほのか・ほのほ・ほのぼの」「みを・みをつくし」などは別語とし、語源を深く分析追求してゆく方法はとらなかつた。ゆえに、「ねや」を「寝屋」と考えず一語と扱っている。自立

語例のない語基「――菜（磯菜・若菜）」「綱（手）のみ」「通ず（切り通ず）のみ」も、夫々一グループ（一例のみでも）とするし「常（夏）のみ」のごとく、「常」が自立性のないものも同様に扱う。接頭・接尾辞も、語基の数としては含める。一語つつ語史や他作品での用例を調査してから語基を決定すべきことはいうまでもないが、まずは同一語（基）の多用現象を調べるために、細かい面は無視せざるをえない。用語については、西下経一・滝沢貞夫氏の「古今集総索引」を利用したが、少し操作して直したもの（「茅」など）もある。固有名詞・枕詞は、原則として省いてある。このようにして整理して数量的に調べてみると、次のごとくになった。（多く扱うべく、総索引に出る別本の語も含む）

イ、異本の歌を含めず（ゆえに一一一首）掛詞・物名にしかない語（「廿日・枇杷」など）を除くと語基数は一〇二〇
ロ、掛詞などの語を省き、異本歌も含めると一〇二六
ハ、掛詞などの語も含め異本歌も含めると一〇七三
いささか恣意的語基認定なので、学術的語基数でないが、一つの参考にはなる。滝沢氏の調査による異語数二〇七一（延べ一八一三七、これらには辞も含む）と比較してみると、約半数といえよう。別本の語を省いたり、語基を学術的に認定したら、この数はさらに

減らさるう。そして、一語基で派生や複合三語以上(「秋・出づ・心・路・無し」など)は二二一あり、複合語の上項にも下項にもなっているもの(「秋」「雲―雲居・白雲」など)は一三三、自立例なく、複合語のみの場合(接辞や、「一」路^ち、「一」菜^ち、「綱^{つな}」、「逃れ^に」^{注2}、まれ「なり」など)は一二二である(数字は重複の場合含む)。さらに、孤例(複合した例がない。「帆・はたて・逃ぐ・短かし」など)も、他に複合形のある語とを語により分類すると次のようになった。(○)印を孤例、●を複合あり、異本歌も含む。

イ、○(形容詞・形容動詞含む)

四〇〇

ロ、○(「あふささるさ・つらづゑ・さむしろ」など) 四

ハ、○(「あやめ草・折り来・埋れ木・さ苗」など) 五七

ニ、●(「入江・うち交す・底ひ・芦毛・神さぶ」など) 四九

ホ、○(「胸走火」「真澄鏡」)

二

この分類も学術的厳密性はないが、参考にはなろう。即ち、千語基余りのうち、孤例や孤例を含む語は右のように五百余りで、約半数は互に複合し合った(●)ものなのである。数量化していないが、一次語(「藤・波・夕・月・夜」など)、二次語(「藤波・月夜」など)、三次語(「小夜中・夕月夜・胸走火」など)と分けてみると、二次語が多く、しかも一次語を用いたものが多い。これらのことは、古今集の用語の語彙の狭さを示しているといえよう。滝沢氏が、品詞について万葉と比較して、体言が少く「古今では素材が固定化してきている」と述べられたことと重なる現象であろう。氏は、動詞が多いことを併せて「素材よりもそれをいかに巧みに精細に叙述するか」に主眼が移ったことをも述べておられる。これらは、古今集歌に、素材や状況をかなり限定した場合の歌が多く採ら

れていることと関連あろう。

二

次に、古今集にあり、万葉集に無い語についてみてみよう(異本歌も含む。別本の語は除く)。この場合、語基は考えず、派生・複合とも、全て別語として数える。^{注3}

まず古今全歌一四〇首を、読人しらず(東歌・神遊・大歌所歌含め)四七九首、撰者二四九首、その他の人四一二首と三グループに分けて多を出してみた。それと比して、異り・延べ語数を出した。(ただし、異り語数は、三グループにわたっては重複する語も含めてそれを異り延べ語数として示した。一グループ内にか用例ない場合は「のみ」の異り語数で示した)。すると、表①のごとくであった。この結果、異り・延べ語数ともに、撰者の集全体に占める歌数の夫々八割以上が十割以上用いられていることがわかる。延べ語数でいうと、撰者では平均して一首に一回以上万葉にない語が現れているといえる。しかも、その他の人に入れた作者の中で、古今集成立当時存命者であると思われる人^{注4}については延べ一三四語ほどあり、撰者の二六三語と合わせると三九七語となり、総延べ数一〇〇六語の四割となる(三九・五〇)。ゆえに、撰者や存命者に多いといえよう。さらに、万葉に一例しかなく、古今集に用いられている語もみておく。表②である。異語数全一五九語のうち撰者六三例あり、集全体での撰者歌数二四九首と比すると、読人しらずや他の人の歌人らのより多くなっている。

このようにみると、万葉にない語(一語しかない語も含む)は撰者に多く現れるといえるが、ついでに、それらの語を「紀貫之全歌集」の用語でみると、「全歌集」にも多く用いられていることが

わかる。即ち、異り語数のみでみると、万葉にない語で古今集にあり貫之歌にもある語は二一八語、万葉に一例のみで古今にあり貫之歌にもある語は七一語である。^{注5} いずれも撰者全体の比率より高い。

三

次に、万葉にない古今集の語を造語法からみてみよう。(異本歌も含む。別本の語は省く。固有名詞は原則として省く。万葉と比較する場合は、万葉のを参考にした。枕詞は入れたが、造語法として分析しにくい面があるので、その形のまま扱うことがほとんど。掛詞にしかない語は省く)。造語法は、二次語以上は、上項を中心にみた。造語は、三つに分けてみた。古今集内部での語基性、例えば「秋霧」は万葉にないが「秋風・秋萩・秋田」が古今にあり(万葉にもあるので対象外だが)、「秋霧」と分解してゆく方法をとる、古今に類語例が無くとも万葉に類語がある場合、例えば古今の「折

表①

総 歌 数	万葉に無い古今集の語		
	異り延べ語数	延 べ 語 数	単独例(異り)
大歌所歌 } 32 } 479 東 歌 } (42.0) 神 遊 歌 } 読入しらず 447 撰 者 249 (21.8) そ の 他 412 (36.14)	4 } 14 } 29 } 306 11 } (47.1) 277 } (64.0)	32 } 380 348 } (37.8) (79.3)	} 不知者のみ 214 } 撰者のみ 114 } その他のみ 184
計 1140	(650)	1006	

注 ()は総数での% []は撰者なら撰者の歌数での% 異り総語数は 650

表②

万葉集に一例の古今集の語 (異り延べ語数)	単 独 例 (異り)
撰 者 63 (39.6) [25.3]	撰者のみ 30 (18.9) [12.0]
読入しらず 67 } (49.1) [16.3]	不知者のみ ⁽⁴⁰⁾ } 51 (32.1) [10.6]
東・神遊・大歌所歌 11 }	(11)
そ の 他 68 (42.8) [16.5]	その他のみ 38 (23.9) [9.2]
(貫之集にも有り) (71) (44.7)	

注 ()は異り総語数 159での% []は選者なら撰者の歌数での% 異り延べ語数とは、撰者、不知者、その他の三グループにわたっては重複することがあるが、撰者なら撰者の中では重複しない。「のみ」の数は、その語が撰者なら撰者しか用いていない語の数である。

り来」は、古今に「祈る」も派生や他の複合もないが、万葉に「祈る・祈り申す」があり、古今の「潮貝」は、古今に「潮」はあるが、「潮一」は他に無いのに万葉に「潮干・潮騒」などある。こんな場合は、万葉にならった造語法とする。そして、万葉にその語基や造語例もみられない語は新出語とする。さらに、これら二グループの他に、音変化など（あかつき↑あかとき、あなた↑かなた、あはゆき↑あわゆき等）は、万葉語と関連あるグループとし、そこにはその他に何らか万葉と関連あって、その派生や複合とみてよい語（糸筋）は、万葉に「糸一」はないが「糸」がある。「濁り」「朽木」は万葉にないが「濁る」「朽つ」は万葉にある等）はここに含めてゆく。このように三つのグループに分け、万葉の造語法にならう語をA、万葉の語の派生や複合をB、万葉に無く新出のものをCとする。そして、派生・複合語は上項中心に語基を分けてゆく（例えば「荒一すき返す・小田・磯海」は一語基三語。分解しにくい語はそのままだ一語一語基と扱う（例えば「あととはか・うしろめたし」^{注6}）など。語源よりも一語の多用途に焦点を合わすのが主たる目的なので、今はそれも許されよう）。又、万葉にない古今の語で一種しかない語基も結果として一語となる（「秋一」は「秋霧」しかない）。このよう
 にみてゆくと、Aには、一五五語（基）その複合・派生含め三三三語、Bには一一五語（基）その複合・派生含めて一三九語、Cには一四二語（基）その複合・派生含め一五八語となる。総語基数六五〇の中でAが半分以上占め、Bと合わせると七六〇くらいとなって、古今集は、万葉にある語を用いて派生や複合させたり、万葉にならって造った語がほとんどだといえよう。万葉と関係なさそうなCグループも、語源的に厳密に語基を追求しつつ分解するとAかBに入る

表⑩

	語基	語数	派生語 二	派生語 以上
A万葉にならう	155	353(54.3)	38	40
B万葉に有る	115	139(21.4)	14	4
C万葉に無い	142	153(24.3)	11	2
計	650			

表⑪

Cグループ 142	
読人しらず 神遊・東歌 撰者 その他	71 3 43(30.3) 77(54.2)(18.7)
	74(52.1)(15.4)
	17.3
	18.7

語が極めて多からう。表⑩に、一語基からの派生が三語以上・二語以上現れる語基数を示した。それをも含め、Aの多いことが目立つ。前章で述べたように、古今にあって万葉に無い語は、異り・延べ語数で六五〇と一〇〇六であり、古今集の総語数と比べると万葉に無い語は少ないことがわかる。しかも、この章でみたように、それら万葉に無い語も、造語法でみると、万葉語の派生や複合であったり、その造語法にならった語が大部分であることがわかる。この事実しかし、新語というのは、いつの時代も外国から借用するのではない限り、既にある語から造るのが原則であるという事実に戻す。ただ、Aの多さや、万葉に無い語が撰者に多いことを考えると、かなり万葉を意識して造語が行われたのではないかという気がするのである。つけ加えると、Cグループ一四二語（基）の使用状況は、表⑩の通りである。撰者の一七〇くらいに現れているが、これは読人しらずやその他の歌人の〇と比して中間であり、数字にも大差なく、撰者に多いとはいえない。ゆえに、撰者に、万葉に無い語の出現率の高かったことと併せ考えると、その万葉に無い語の

造り方は、A Bが多い。即ち、万葉に無い語といっても、万葉の語と関連あるものが多いということである。

四

以上のごとく調査したのであるが、その調査段階で気づいたことや調査結果を合せて古今集の語構成からみた特色のいくつかについて述べてみよう。

(一)

万葉にない語は、撰者や撰者時代の人に多いと述べたが、それは、いかなることを示しているのだろうか。造語法で、CよりA Bが多く、万葉に無い語も万葉と大いに関連あり、関連の少ないCグループに例外撰者は少いことは既述した通りである。そして、万葉に無い語で、選者のみ、不明者のみ、その他のみに出現する語は、異り語で夫々一一四、二一四、一八四語であり(表①)、夫々の歌数との多では三者ともほとんど差は出なかった。撰者は例外新しい語や造語よりも、万葉以来の伝統的な語や造語を重んじているといえよう。万葉に無い語の出現率が撰者に高いのに、その造語法は万葉にならっているということは、伝統をふまえてつつ新しい語や語感を探り、古今集にふさわしい用語を選び、歌の用語としての啓蒙意識もあったであろうと思われる。むしろ、一方では「春立つ」「血の涙」のように、和語を用いて漢語を新しい熟語にしたりもするし、漢語を訓読して(「白雲」「秋の田」など、^注これらも万葉に既にあるが)和語化したりもしている。が、大体は、古来の万葉の語の復活や蘇生をも意識的に行ったことであろう。万葉に無い語や一例しか無い語の中には、偶然一つくらいしか現れなかったにすぎない語も含まれよう(「重し」「変りゆく」「咲き初む」「川風・川霧」など)が、

死語に近い語や、貴族の間であまり用いない語も古今集に含ませていったのだろう。そしてその中には、例えば「仙人」「晚稻」などのように(万葉に一例と、貫之にのみ有り。「仮鹿」も万に一、忠岑にのみ)元来、木こりや農民らの生活語彙であったかもしれないものを残存させ、歌の語として意識的に選びとったと思われる語も珍しくない。それは、東歌・神遊歌・大歌所御歌も含めて詠人しらずに多いようである(「稲舟」「東歌一、万一、など)。又、逆に、万葉に数例か多数あり、古今に一例という語も、ほぼ同傾向にあり、「には鳥(万八、躬恒一)・下草(万五、不知一)・噯る(万五、不知一)・呼子鳥(万九、不知一)」のように、撰者や詠人しらずに多いようだ。古語や生活語は、歌詠や詠人しらず歌にうけつがれることが多いのは当然だろうが、撰者もそれを意識して選び、又、自身も撰取しようである。例えば「白檀弓」は、万葉に六、貫之に一例のみだが、「檀弓」は万葉三例、神遊歌一例ある。「水」は、万葉では、「み(な)ー」とよく造語されるが、古今では「水隠る(友則一)・水上(忠岑一・不知一)・水底(万一〇、貫之)・水泡(万六、貫之)・水脈(万一二、不知一)」のごとく、撰者か詠人しらずに多い(「水隠る・水上」は万葉に無く、万葉的新造語であろう)。他にも、例えば、「川風(万一、貫之一、不知一)・川辺(万三、貫之一)・玉藻(万五六、不知・衣通姫・友則・貫之各一)・名残り(万五、貫之一)・野山(万一、友則・忠岑各一)・冬ごもり(万一〇、貫之)等々、撰者や詠人しらずに用いられる語は多い。むしろ、その他の歌人の歌にも用いられている(「古屋(万一、登一)・古し(万八・素性一)・躰(万二五、篁一)」等)が、古今集の選歌の折に、その選歌基準の一つに、古今好みの語や造語法があって、撰者

によって選ばれ、又、自身も作歌したと思える。例えば「朝」という語は、万葉四〇、古今四例あるが、この用例差と同様に、「朝」という造語は古今でせいぜい八種なのに、万葉では三十八種ほどもある。古今集で語基として「白・秋・心・風・色・来」のごとく、造語の種類や用例が多いものは、古今好みの語基といえよう。古今好みの語基の語彙的特色について詳しく述べる紙面がないが、気まぐれの好みでなく、一つの見識をもったものと思えるのである。それは次に述べる。

(二)

古今集の用語は、既述のように、語彙的限定・狭さを印象づけているが、それは、みだりに新語を増やさず、増やすなら、一語(基)を多彩に派生や複合させてゆく方法をとっていることでもあった。その狭さの中で、かえって、新しい語感や微妙さを探ったのである。「浅し・嬉し」など、万葉にもある語に万葉にもある接尾辞を付けて「浅み・嬉しさ」にするなどは、たまたまそれが万葉に無かつただけなのかもしれないが、「天つ一星・風」は、万葉の「天つ一空・神・印・水・霧・ひれ・みかど」の類推からの造語であろう。万葉に「秋」の用法は多いが、「秋霧」は無い。万葉に「板」はあるが「板間」は無く(古今では貫之一例のみ)、「岩」も万葉にあるが「岩清水」(古今では忠岑一、不知二)、「岩波」(古今では貫之一のみ)は無い。複合語の場合、上項語基も造語法も万葉にみられるのであるが、上項語基を接頭辞に近く用いて、意識的に種々の微妙さを求めたようである。例えば「霧(万二九、古三三)」は、万葉には「霧る」という動詞まであったのが無くなっているが、「天霧る(不知一)」は見出せる。又、「秋霧」の他に「朝霧(万一三、古二)

・川霧(万一、古二)・夕霧(万九、古一)があり、これらは万葉にもあるが、「秋・朝・川・夕」という語基は又他とも結合しやすい語基である。むろんそれら語基も万葉にあるが、古今集の場合、範囲が閉鎖的なので、それらの用法にある特色が生じているように思える。例えば「秋」は、「春・夏・秋・冬」の中の一つの語基(接頭語的)として位置づけられるし、「朝」も、「朝・昼・夕」の一つというように対になって意識されているように見える。時間的な対としては、他にも「夜・昼」(「夜半・昼間」など)、「今・昔」(「今さら・昔辺」など)、「初(はつ)・古」(「初声・古声」など)や、「咲く・散る」なども含まれよう。空間では、「こ・そ・か」や、「近・遠」(「近し・遠し・遠ざかる・遙けし・遙々」など)、「都・里」(「都人・里人」など)、「をち・こち」(「行く・来」・「入る・出づ」など)であろう。その他にも、「大和・唐」(「大和撫子・唐琴」など)、「真・仮」(「真澄鏡・仮庵」など)、「有・無」(「有り数・無しぶ」など)、「夢・現」(「大・小こ」(「大空・小萩・小夜・小舟」など)、「白・黒」(「白糸・黒髪」など)、「上・中・下」(「水上」・「中垣・下草」など)、「本・末」(「本疎・末摘花」など)、「浅・深」(「浅み・深む」など)、「浮く・沈む」(「立つ・居」など)もあるし、語形として対にならぬ(「真」・「片」(「片糸」など)、「前」・「奥」(「奥山」など)なども含めよう。むろん語彙上のきれいな対立関係ある語(都人・里人など)は少いし、これらはほとんど万葉にもある語基や造語法であるが、万葉より歌数も語数も少く狭い古今集の範囲で用いられると、対概念が目につきやすい。又、「秋霧・夏衣・冬川・冬草」「初風・初時雨・初霜・初花染・初

表⑤

	「初—」		「四季—」		「白—」	
	異り	延べ	異	延	異	延
撰者	4	7	11	28	9	26
読しらす	3	3	10	31	6	13
その他	4	6	9	24	9	26

(注) 枕詞含む。異本歌含まず。

雁が音」「唐紅・唐錦・唐琴」など万葉に無い語も多く、「霧・衣・川・草・風・霜」など、ごくありふれた普通名詞をそれら接頭辞的語基で微妙に区分して、ニュアンスを楽しんでいるようである。「春霞(万18、古21)」に対する「秋霧(万0、古7)」、「夏草(万13、古2)」に対する「冬草(万0、古2)」という対意識から造った語もある。そして又、「霧・衣」などさらに「川霧・藤衣」のごとく別の語基とも結合させ、又「川風・藤波」のごとく互に循環させてゆく。万葉集と異った語基や造語法はほとんど無いのに、対性や循環性が感じられるのは、やはり素材の範囲の狭さにもよらう。それは、

歌の素材や状況の限定によって、結果的にそうなった面もあるが、意識的・意図的に選ばれ・造れた語も少くないように思える。古今集に四季の巻のあるごとく、語として四季の語を示すものが好まれたらうし、古今集歌の特色たる推移感覚は、四季のみならず、推移の初めと終りに興味を持って(むろん、万葉にもかかる語は珍しくないが、古今集の狭い範囲内ではそれがやや自立ちやすい)「初—」「初む」「—果つ」「咲き初む(万1、古2)・枯れ果つ(万0、古2)」など、空間的推移なら「近—・遠—」「行く・来—」などもあり(その複合派生もある。「散り来・過ぎゆく」「枯れゆく(万0、古1)」など再び時間的推移にもなることあ

り)、集の歌の特色をそのまま語や語構成にも反映しているといえよう。そういう語が気に入って、集に採用した歌もありそうである。

。紅の初花染めの色深く思ひし心われ忘れめや(恋四四不知)この歌など初めの強い思いを具象化した「初花染」が無ければ一首の良さは消滅するだらう。又、四季の巻のみならず、季のある歌は、恋その他の巻にもみられるように、四季や「初—」の語も、四季以外の巻でも少なくないし四季にない語さえある(「夏衣」は恋と雑体にある。「夏野」「夏虫」は恋にあり、いづれも四季の巻にない)。そして、かかる語は、当代も特に撰者好みであって、選ぶのみならず、自身もよく用いている。例えば、「初—」は、「初風(不知2)・初雁(躬恒・貫之・元方・伊勢・黒主・不知各2)・初雁が音(友則1)・初声(素性1)・初時雨(躬恒1)・初霜(躬恒三・忠房1)・初花(当純1)・初花染(不知1)」で全てだが、読しらす三名の三例以外は全て存命者であり、撰者に多いのである。「春—・夏—・秋—・冬—」の語も全十八語(異り)あるが、異り・延べ語数は夫々表⑥の通りであり、撰者の歌数からするとやはり撰者に多い。この他にも「白—」なども表示のごとく同傾向にある。前述した対的・接辞的語基による語全てにそうはいえないが、古今集らしい四季と「初—」の語基に認められるのは面白い。撰者の和歌への好みや傾向が語彙にも現れているといえよう。又、「春—・夏—・秋—」の多くは、漢語の訓読によって万葉時代に漢詩文に造詣深い歌人によって生じ、歌語として以降も用いられたという佐藤武義氏の論がある。平安時代の歌人も、漢詩文と無縁でない人は多かったであろうし、撰者は特に、詩語と歌語に鈍感でありえず、それらをうけついでであろうし又それにならった新しい造語も行ったのであろう。

以上のように、語構成の大まかな調査から古今集の語彙の特色をみてきたが、具体的な語基分類表とか、用語集とかを示さねば、その分類の仕方などにおいて問題があるかもしれない(むろんノートに用意はしている)。紙面の都合で省略したのだが、出てきた傾向は大まかには間違っていないと思う。万葉語との比較など、語彙や語構成上の面からもう少し細かくやりたいと思うし、古今集時代の私家集や土佐日記・伊勢物語・竹取物語などとの関連も探るべきであろう。又、作者の分類も別の分け方によって新たな面が見えてくるかもしれない。そして何よりも、個々の語の語史などの研究が必要であろう。それらの積み重ねによってある程度の把握が出来るから語構成は考察し直してみるべきことであろう。が、とりあえず大まかに眺めてみた。

歌語の定義はむつかしく、すぐには筆者には扱えないが、古今集の語全てが歌によまれた語という広義の解釈をとるなら、本稿も私なりの歌語の研究の出発といえるのかもしれない。

一九八六・七・十五

(注)

- 1、「古今集の用語」(『国文学』昭和三年七月号)など
- 2、「あはれなり」は「あはれ」の形と両方あるに對し、「まれなり」は「まれ」がない。
- 3、この場合、万葉と古今とで意味が同じで、発音の違いによる語も一応

別語とみなす。例。あたらし↓あらたし、あかつき↓あかとき。ただし「夢」については、万葉で「イメ」、古今で「ユメ」であるが、使用例が多く(8例)、全体の%に関わるかもしれないので、これは万葉と同語とみなしておいた。

4、村瀬敏夫氏『古今集の基盤と周辺』

$$5、\frac{218}{650} = 33.5\% \quad \frac{202}{650} = 31.1\% \quad \frac{71}{159} = 44.7\% \quad \frac{63}{159} = 39.6\%$$

6、「うしろめたし」は「うしろ目いたし」が語源といわれるが、熟合度が強しし、又集に「うしろ」もないので一語と考えた。

7、例えば「あだ」「あだ」なり・浪・人・物」のごとく、「なり・浪・人・物」は万葉にも多く、「あだ」「あだ」が万葉に無いのでCに入れたが、派生や複合語の後項からもみるとしたら、Cの多くはBに入る。

8、佐藤武義氏「歌語としての万葉語『白雪』について」(『文芸研究』50年1月78集)、「翻訳語としての万葉語の考察―『白雲』を中心にして―」(『解釈昭50年11月)、「同一『春』『夏』『秋』の複合語を中心に」(『夫々』佐藤喜代治教授退官記念国語学論集)、「宮城教育大学国語国文」昭52年4月、「文芸研究92集」54年9月)

〔なお、異本歌の歌は省いておくべきだったかもしれないが、29首増しても大勢は不変であるし、多くを扱っておきたくて含めた。総歌数は一一四〇(一一一一)、そのうち、撰者二四九(二四三)、その他四一二(四〇八)、読人しらずら四七九(四六〇)、カッコ内が異本歌除く歌数である。なお、「古今集における『白』『初』『四季』の語彙―詩語から歌語へ―」について『光華女子大学紀要』(昭61年12月)に載せているので、参照されたい)〕